

国内の畜産物の需給動向

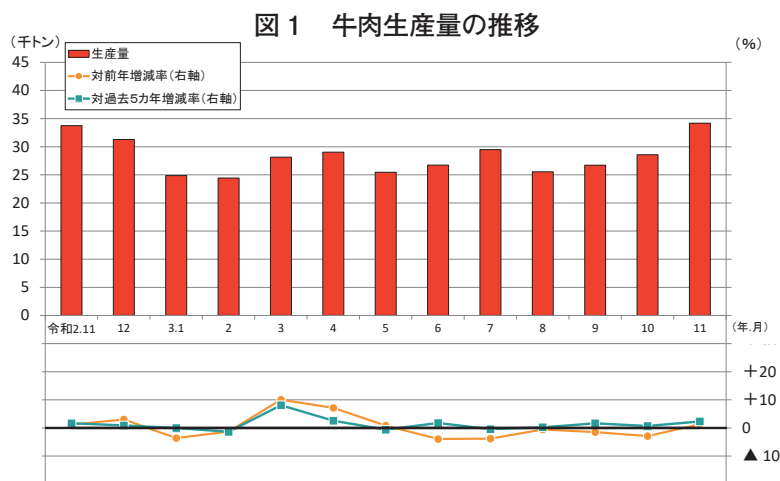
牛肉

3年11月の牛肉生産量、前年同月比1.3%増

1 令和3年11月の牛肉生産量は、3万4186トン（前年同月比1.3%増）と前年同月をわずかに上回った（図1）。品種別では、和牛は1万7654トン（同0.5%減）と前年同月をわずかに下回った一方、交雑種は8299トン（同5.0%増）とやや、乳

用種は7764トン（同1.7%増）とわずかに、いずれも前年同月を上回った。

なお、過去5カ年の11月の平均生産量との比較では、2.3%増とわずかに上回る結果となった。



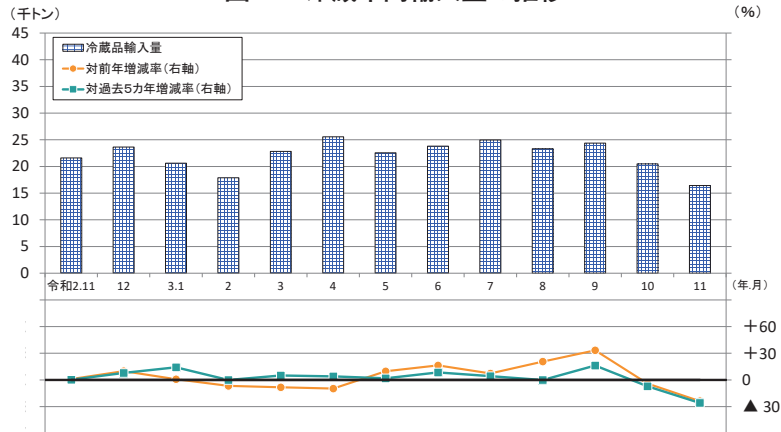
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 11月の輸入量は、米国産および豪州産の輸入量が現地価格の高止まりなどにより減少したことから、冷蔵品は、1万6432トン（同23.9%減）と大幅に（図2）、冷凍品は、2万6194トン（同5.7%減）とやや、前年同月を下回った（図3）。この

結果、全体では4万2651トン（同13.7%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

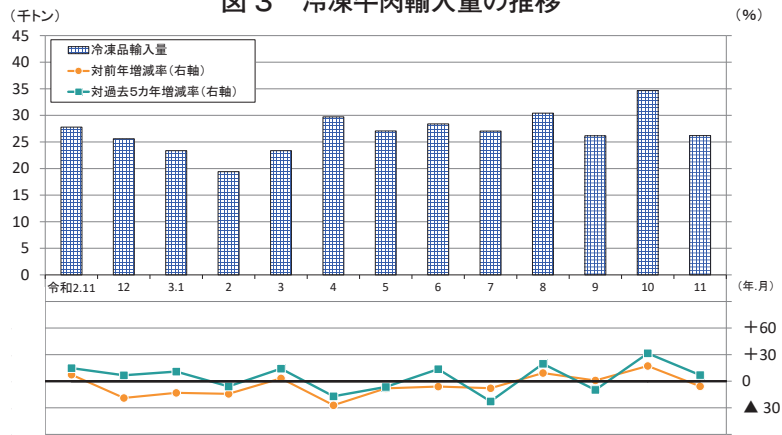
なお、過去5カ年の11月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は25.9%減と大幅に下回った一方、冷凍品は6.9%増とかなりの程度上回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 11月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は168グラム（同12.5%減）と前年同月をかなり大きく下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の11月の平均消費量との比較では、10.3%減とかなりの程度下回る結果となった。

また、外食産業全体の売上高（同0.2%減）は、全国的に営業時間の短縮要請および酒類提供の制限が解除され、好調が続くファーストフード洋風がけん引したものの、夜間の客足が鈍かったことから、前年同月並みとなった（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。

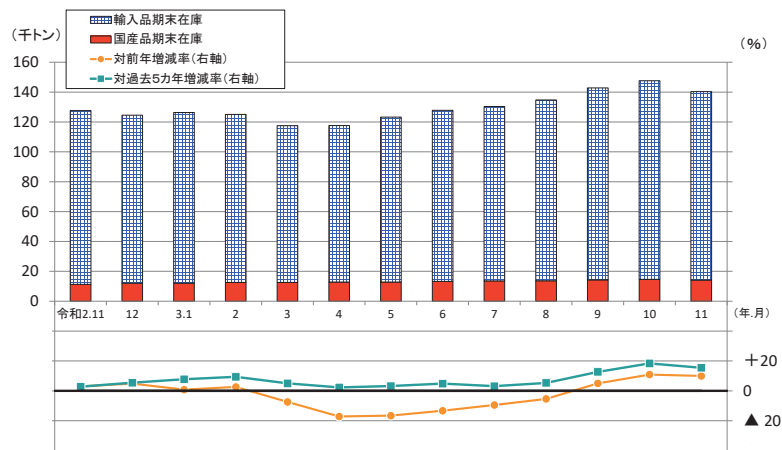
このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフード洋風は、テイクアウト、デリバリー、ドライブスルーの需要が堅調だったことから、同3.6%増と前年同月をやや上回った。また、牛丼店を含むファーストフード和風は、客足が戻り、新商品も好調だったことから、同2.4%増と前年同月をわずかに上回った。一方、焼き肉は、夜間の客足の戻りが遅いことに加え、以前の営業時間帯に合わせた労働力の確保が追い付かなかったことから、同5.7%減と前年同月をやや下回った。

4 11月の推定期末在庫は、14万348トン（同10.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図4）。このうち、輸入品は12万6186トン（同8.5%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

推定出回り量は、8万3256トン（同

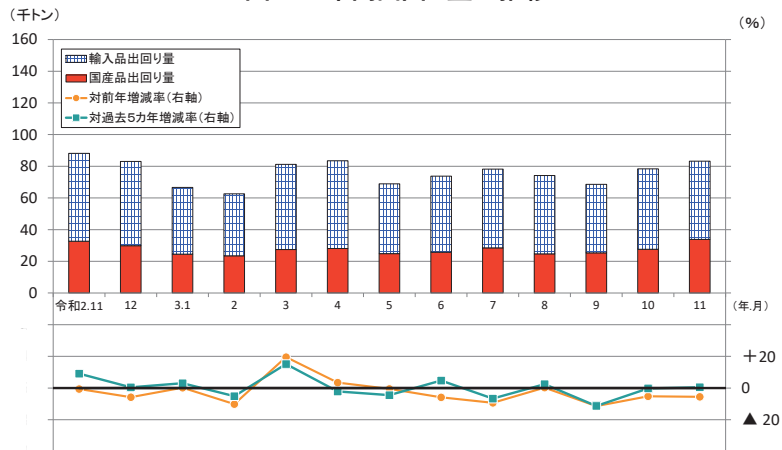
5.5%減）と前年同月をやや下回った（図5）。このうち、国産品は3万3832トン（同3.4%増）と前年同月をやや上回った一方、輸入品は4万9424トン（同10.8%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

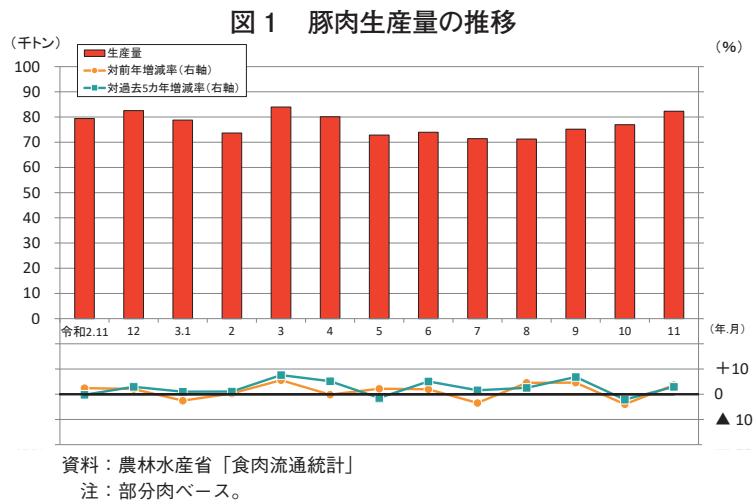
(畜産振興部 今岡 峻人)

豚 肉

3年11月の豚肉生産量、前年同月比3.7%増

1 令和3年11月の豚肉生産量は、8万2305トン（前年同月比3.7%増）と前年同月をやや上回った（図1）。

なお、過去5カ年の11月の平均生産量との比較では、2.9%増とわずかに上回る結果となった。

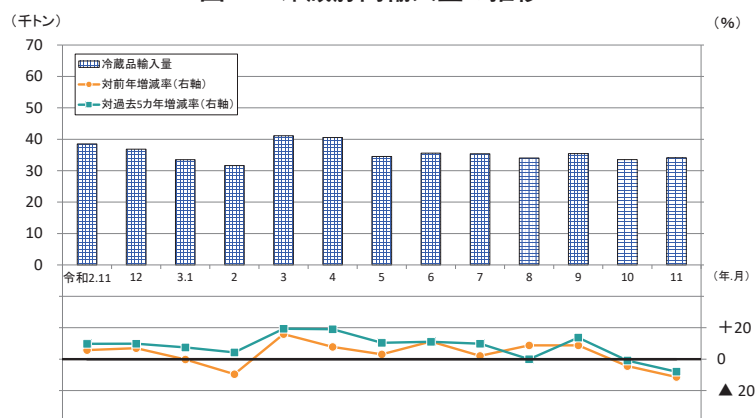


2 11月の輸入量は、冷蔵品は、北米における現地価格の高止まりの影響などから、3万4128トン（同11.4%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図2）。冷凍品は、国内在庫が高い水準であったことなどにより前年の輸入量が少なかったことに加え、中国の買い付けが弱まったことにより相場が下がった欧州産の輸入量が増えていることなどから、4万4333トン（同38.7%増）

と前年同月を大幅に上回った（図3）。この結果、全体では7万8461トン（同11.3%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

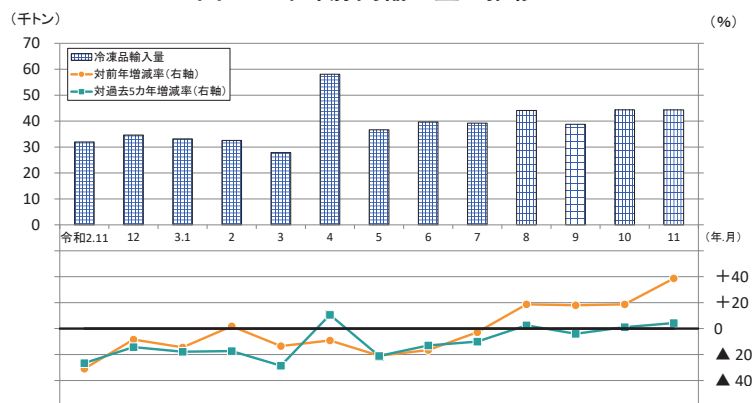
なお、過去5カ年の11月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は8.0%減とかなりの程度下回った一方、冷凍品は4.3%増とやや上回る結果となった。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 11月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、628グラム（同3.8%減）と前年同月をやや下回った（総務省「家計調査」）。

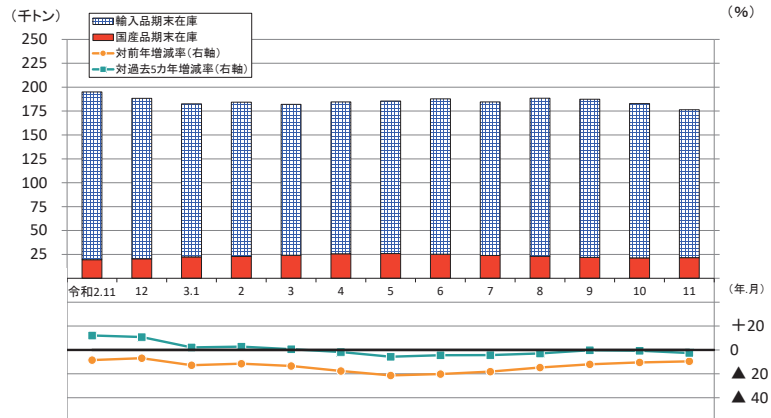
なお、過去5カ年の11月の平均消費量との比較では、2.3%増とわずかに上回る結果となった。

4 11月の推定期末在庫は、17万6355トン（同9.6%減）と前年同月をかなりの程度下回った。このうち、輸入品は、15万

4751トン（同11.9%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図4）。

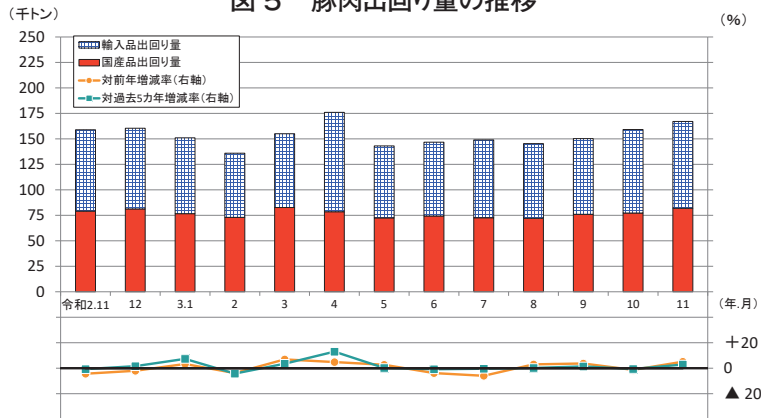
推定出回り量は16万7066トン（同5.1%増）と前年同月をやや上回った（図5）。このうち、国産品は8万1908トン（同3.4%増）とやや、輸入品は8万5158トン（同6.7%増）とかなりの程度、いずれも前年同月を上回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 田中 美宇)

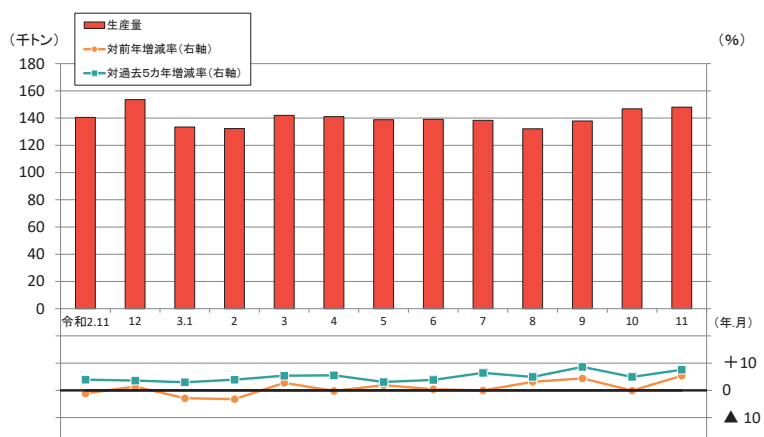
鶏 肉

3年11月の鶏肉生産量、前年同月比5.4%増

1 令和3年11月の鶏肉生産量は、好調な需要を背景に、14万8012トン（前年同月比5.4%増）と前年同月をやや上回った（図1）。

なお、過去5カ年の11月の平均生産量との比較では、7.6%増とかなりの程度上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移



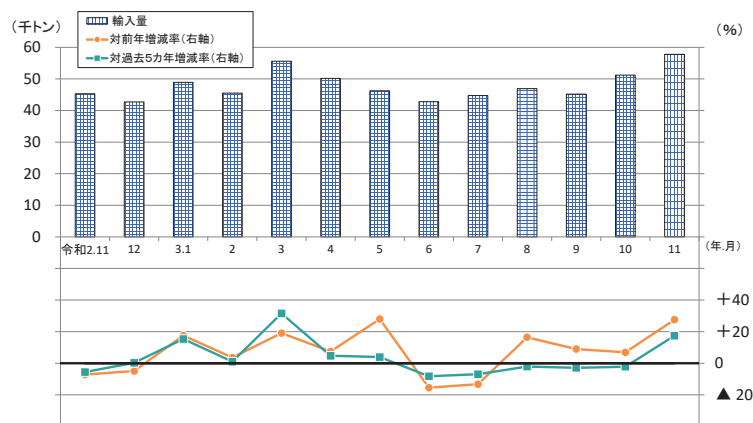
資料：農畜産業振興機構調べ
 注1：骨付き肉ベース。
 注2：成鶏肉を含む。

2 11月の輸入量は、タイにおける新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響によりタイ産の輸入量が減少した一方、国内の輸入鶏肉在庫の減少などによりブラジル産の輸入量が増加したことなどから、

5万7790トン（同27.5%増）と前年同月を大幅に上回った（図2）。

なお、過去5カ年の11月の平均輸入量との比較でも、17.4%増と大幅に上回る結果となった。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
 注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

3 11月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）は、524グラム（同2.9%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の11月の平均消費量との比較では、5.9%増とやや上回る結果となった。

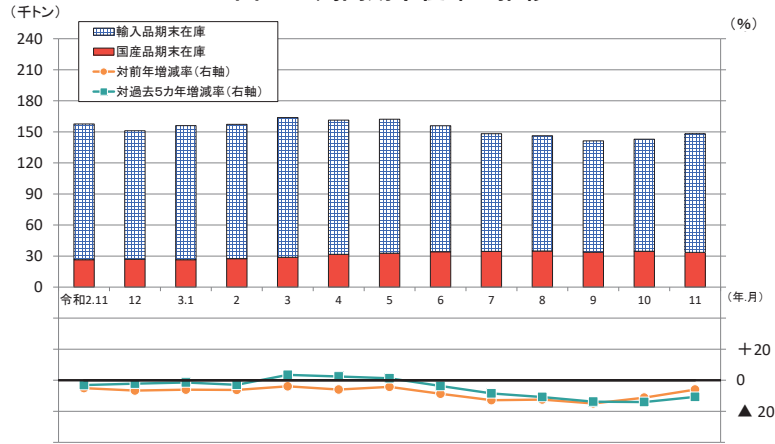
4 11月の推定期末在庫は、14万8227トン（同6.0%減）と前年同月をかなりの程度下回った（図3）。このうち、輸入品は11万4671トン（同12.6%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

推定出回り量は、20万452トン（同6.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図

4)。このうち、国産品は14万9125トン
(同5.9%増)とやや、輸入品は5万1327

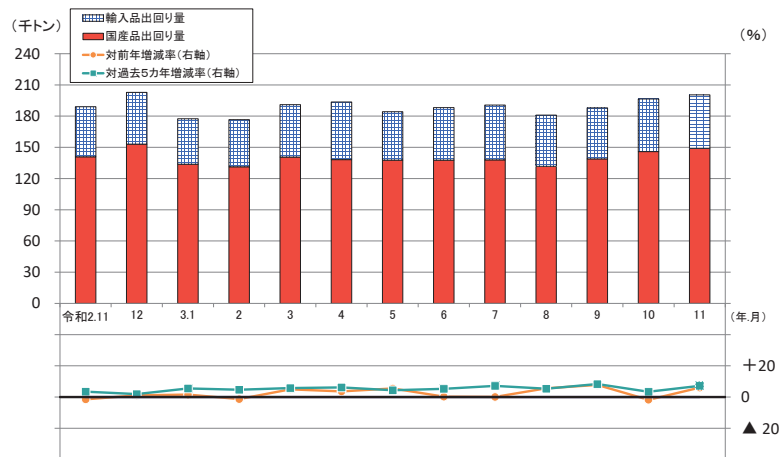
トン(同6.5%増)とかなりの程度、いず
れも前年同月を上回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 前田 絵梨)

牛乳・乳製品

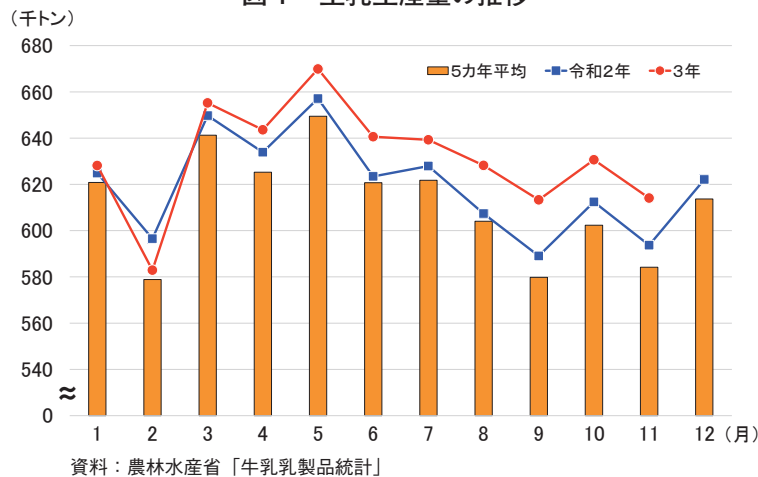
官民一丸の対応により年末年始の処理不可能乳の発生を回避

令和3年11月の生乳生産量、前年同月比3.4%増

令和3年11月の全国の生乳生産量は、61万4100トン（前年同月比3.4%増）となり、

地域別に見ると、北海道は34万6980トン（同4.4%増）、都府県は26万7120トン（同2.2%増）といずれも堅調に推移した（図1、農林水産省「牛乳乳製品統計」）。

図1 生乳生産量の推移

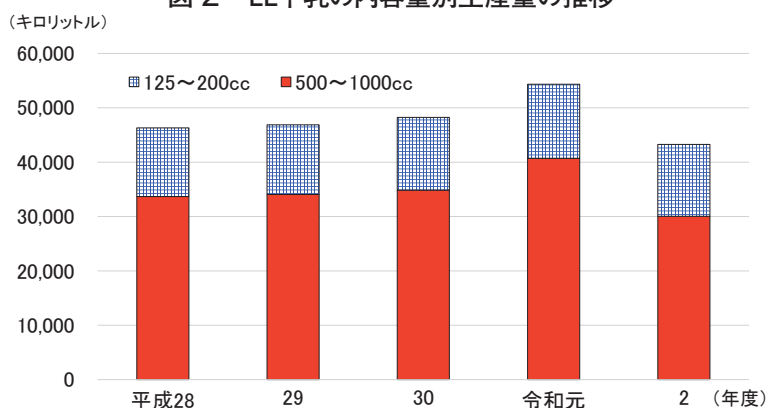


用途別処理量については、牛乳等向けが32万4951トン（同1.6%減）、乳製品向けが28万4999トン（同9.8%増）となった。乳製品向けの内訳は、脱脂粉乳・バター等向けが13万7009トン（同13.7%増）、チーズ向けが3万4448トン（同4.6%増）、クリーム等向けが11万1212トン（同6.4%増）となっている（農林水産省「牛乳乳製品統計」、農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

令和2年度のLL牛乳の生産量、前年度比20.4%減も輸出は好調

農林水産省が11月に公表した「LL（ロングライフ）牛乳等の生産量の推移」によると、令和2年度のLL牛乳生産量は4万3253キロリットル（前年度比20.4%減）と、前年度から大幅に減少した。内容量別に見ると、125～200ccでは1万3202キロリットル（同3.0%減）、500～1000ccでは3万51キロリットル（同26.2%減）と特に大型容器での生産量が大幅に減少しており、LL牛乳全体の生産量減少につながっている（図2）。

図2 LL牛乳の内容量別生産量の推移

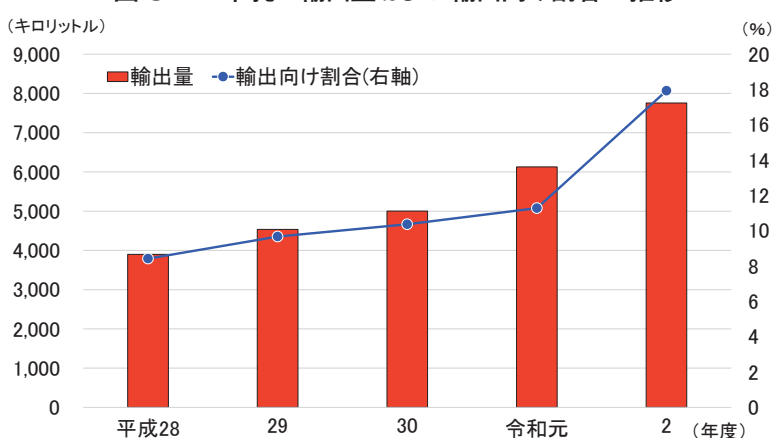


資料：農林水産省「LL（ロングライフ）牛乳等の生産量の推移」

LL牛乳は常温でも長期間保存可能であり、遠隔地向けや自動販売機にて販売される他、香港やシンガポールなど東アジア・東南アジア向けへの輸出が旺盛である（財務省「貿易統計」）。輸出处への割合はいまだ20%未満

と高くはないものの、2年度も牛乳の輸出处・輸出处向け割合は増加しており、輸出处については前年度から25%以上の伸長が見られる（図3）。

図3 LL牛乳の輸出处および輸出处向け割合の推移



資料：財務省「貿易統計」、農林水産省「LL（ロングライフ）牛乳等の生産量の推移」

関係各所の働きかけにより年末年始の生乳廃棄を回避

令和3年から4年にかけての年末年始に懸念された生乳廃棄は、乳業・酪農関係各所の取り組みにより回避された。

COVID-19拡大に伴う飲食店の時短営業や巣ごもり需要の一服により飲用牛乳などの業務用需要が落ち込んでいる一方で、今年度

は夏～秋にかけて例年の気温を下回っており、生乳の生産量が好調に推移した。こうした異例の状況に加え、もとより冬場は生乳生産量が増加するのに対して、学校給食の停止などから飲用需要が落ち込む需給構造になっている。牛乳等に仕向けられない生乳は保存の利くバターや脱脂粉乳に仕向けられるものの、その在庫量はコロナ禍により類を見ないほどに積み増しており、飲用牛乳としての消

費や生産者による出荷抑制などが求められた。

乳業団体や農林水産省の「NEW（乳）プラスワンプロジェクト」による消費拡大運動、生産者の一時的な出荷抑制、乳業メーカーが年末年始も工場を稼働しバターなどの増産など、官民一丸となった業界の対応が生乳廃棄の回避に奏功した。また、小売店においても牛乳消費拡大に関する各種キャンペーンが行われ、消費拡大運動が広く実施されることとなった。

令和4年度の畜産物価格は単価・数量ともに据え置き

令和3年12月24日に開催された「食料・農業・農村政策審議会」において、4年度の畜産物価格などの算定について諮問・答申が行われ、同価格などが決定した（表）。加工原料乳生産者補給金単価は1キログラム当たり8.26円、集送乳調整金単価は同2.59円と、いずれも前年度と同じ結果となった。また、総交付対象数量についても345万トンに据え置かれた。

表 加工原料乳生産者補給金単価、集送乳調整金単価および総交付対象数量の推移

	平成30年度	31年度	令和2年度	3年度	4年度
生産者補給金単価（円/kg）	8.23	8.31	8.31	8.26	8.26
集送乳調整金単価（円/kg）	2.43	2.49	2.54	2.59	2.59
総交付対象数量（万トン）	340	340	345	345	345

資料：農林水産省「食料・農業・農村政策審議会」

（酪農乳業部 古角 太進）

令和2年の畜産物生産費

農林水産省は、令和3年12月17日、「畜産物生産費統計（令和2年）」を公表した。

品目ごとの内容は以下の通りである。

【肥育牛】肥育牛生産費は、交雑種肥育牛および乳用雄肥育牛で増加

1. 去勢若齢肥育牛

去勢若齢肥育牛の1頭当たり資本利子・地代全額算入生産費（以下「全算入生産費」という）は、133万6382円（前年比0.0%減）となり、前年並みとなった（表1、図1）。費目別に見ると、費用合計の62.5%を占めるもと畜費は83万447円（同1.6%減）と前年をわずかに下回った一方、25.2%を占める飼料費は33万4711円（同3.4%増）と前年をやや上回った。

なお、1頭当たりの販売価格は、120万5545円（同9.5%安）と前年をかなりの程度下回った。

2. 交雑種肥育牛

交雑種肥育牛の1頭当たり全算入生産費は、82万8217円（同4.2%増）となり、前年をやや上回った。（表1、図1）。費目別に見ると、費用合計の55.1%を占めるもと畜費は45万5172円（同12.2%増）と前年を

かなり大きく上回った一方、34.9%を占める飼料費は28万8525円（同3.2%減）と前年をやや下回った。

なお、1頭当たりの販売価格は、69万1713円（同13.5%安）と前年をかなり大きく下回った。

3. 乳用雄肥育牛

乳用雄肥育牛の1頭当たり全算入生産費は、54万5428円（同2.0%増）となり、前年をわずかに上回った（表1、図1）。費目別に見ると、費用合計の48.7%を占めるもと畜費は26万4912円（同4.5%増）と前年をやや上回った一方、39.9%を占める飼料費は21万6993円（同1.3%減）と前年をわずかに下回った。

なお、1頭当たりの販売価格は、49万7711円（同2.6%安）と前年をわずかに下回った。

費用合計に占める割合はもと畜費が最も大きく、もと畜費の増加が交雑種肥育牛および乳用雄肥育牛の生産費の増加につながっている。それぞれのもと畜費を見ると、去勢若齢肥育牛は直近10年間に於いて3番目に高く、交雑種肥育牛および乳用雄肥育牛は最も高い水準となった（図2）。

なお、1頭当たりの販売価格は、3品種すべてで前年水準を下回った。特に、去勢若齢肥育牛および交雑種肥育牛は、COVID-19の影響による外食需要の減少などにより下落幅が大きくなったとみられる。

表1 令和2年 肥育牛1頭当たりの生産費

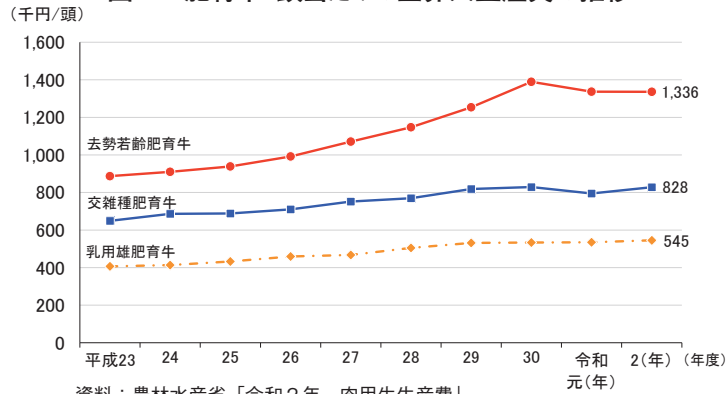
区分	単位	去勢若齢肥育牛			交雑種肥育牛			乳用雄肥育牛			
			前年比 (増減率)	構成割合		前年比 (増減率)	構成割合		前年比 (増減率)	構成割合	
物財費	円	1,246,351	0.0%	93.9%	786,657	5.1%	95.3%	521,087	2.2%	95.8%	
うち もと畜費	〃	830,447	▲ 1.6%	62.5%	455,172	12.2%	55.1%	264,912	4.5%	48.7%	
飼料費	〃	334,711	3.4%	25.2%	288,525	▲ 3.2%	34.9%	216,993	▲ 1.3%	39.9%	
労働費	〃	81,525	4.7%	6.1%	38,957	▲ 3.0%	4.7%	22,936	2.8%	4.2%	
費用合計	〃	1,327,876	0.3%	100.0%	825,614	4.6%	100.0%	544,023	2.2%	100.0%	
全算入生産費	〃	1,336,382	▲ 0.0%		828,217	4.2%		545,428	2.0%		
参考	1 経営体当たり 販売頭数	頭	42.3	▲ 0.2%		117.8	15.6%		149.8	35.4%	
	販売時月齢	月	29.8	1.4%		26.0	▲ 0.8%		20.6	0.0%	
	販売時生体重	kg	809.6	2.0%		831.7	2.3%		791.9	1.5%	
	販売価格	円/頭	1,205,545	▲ 9.5%		691,713	▲ 13.5%		497,711	▲ 2.6%	
	1 頭当たり投下 労働時間	時間	50.80	1.6%		23.12	▲ 4.9%		12.89	▲ 1.8%	

資料：農林水産省「令和2年 肉用牛生産費」

注1：飼料費には、配合飼料価格安定制度の補填金は含まない。

注2：全算入生産費は、「資本金・地代全額算入生産費」の略称。

図1 肥育牛1頭当たりの全算入生産費の推移



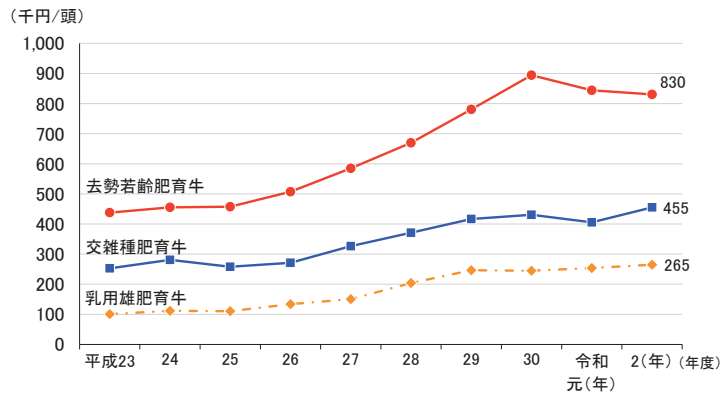
資料：農林水産省「令和2年 肉用牛生産費」

注1：飼料費には、配合飼料価格安定制度の補填金は含まない。

注2：全算入生産費は、「資本利子・地代全額算入生産費」の略称。

注3：調査期間は、平成23～30年度は4月～翌3月、令和元年以降は1～12月。

図2 肥育牛1頭当たりのもと畜費の推移



資料：農林水産省「畜産物生産費」(平成23年度～令和元年)、「令和2年 肉用牛生産費」(令和2年)

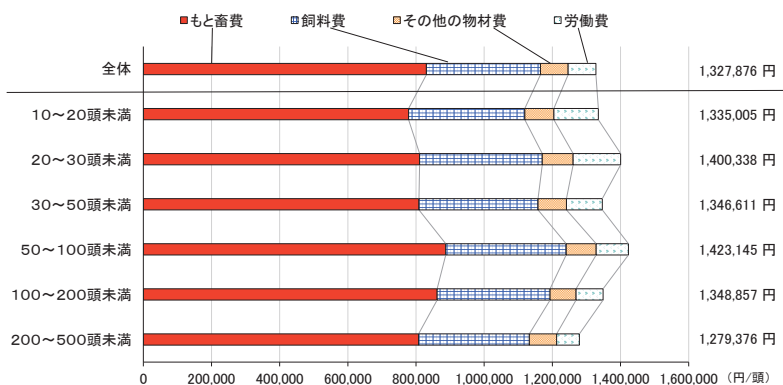
注：調査期間は、平成23～30年度は4月～翌3月、令和元年以降は1～12月。

飼養規模ごとの肥育牛1頭当たりの費用合計を見ると、おおむね規模が大きい経営で費用合計が低くなる傾向が見られる(図3、4、5)。

品種ごとに「10～20頭未満」以上の区分について見ると、去勢若齢肥育牛の費用合計が最も高いのは「50～100頭未満」の142万3145円、最も低いのは「200～500頭未満」の127万9376円で、その差は14万

3769円となった。交雑種肥育牛の費用合計が最も高いのは「20～30頭未満」の90万6293円、最も低いのは「200～500頭未満」の81万749円で、その差は9万5544円となった。乳用雄肥育牛の費用合計が最も高いのは「10～20頭未満」の62万5197円、最も低いのは「500頭以上」の52万6135円で、その差は9万9062円となった。

図3 令和2年 飼養規模ごとの去勢若齢肥育牛1頭当たりの費用合計

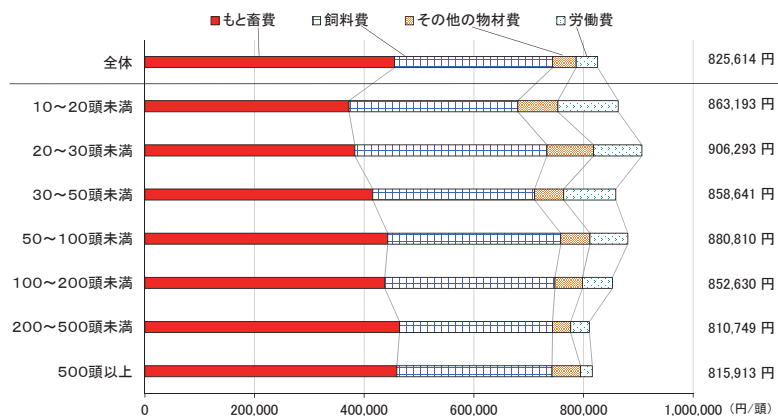


資料：農林水産省「令和2年 肉用牛生産費」

注1：飼養頭数規模は、去勢若齢肥育和牛の飼養月平均頭数である。

注2：飼料費には、配合飼料価格安定制度の補填金は含まない。

図4 令和2年 飼養規模ごとの交雑種肥育牛1頭当たりの費用合計

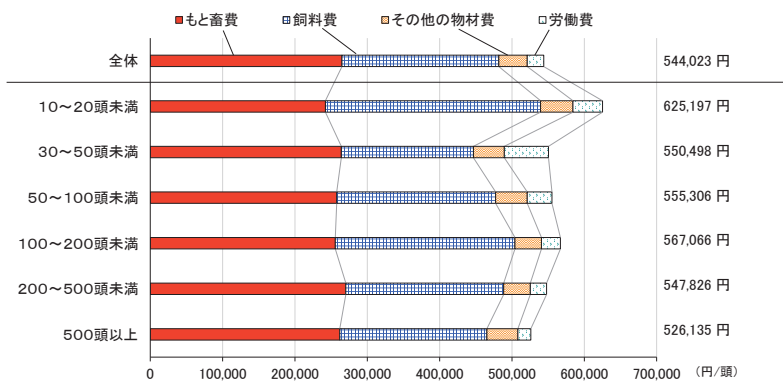


資料：農林水産省「令和2年 肉用牛生産費」

注1：飼養頭数規模は、交雑種肥育牛の飼養月平均頭数である。

注2：飼料費には、配合飼料価格安定制度の補填金は含まない。

図5 令和2年 飼養規模ごとの乳用雄肥育牛1頭当たりの費用合計



資料：農林水産省「令和2年 肉用牛生産費」

注1：飼養頭数規模は、乳用雄肥育牛の飼養月平均頭数である。

注2：飼料費には、配合飼料価格安定制度の補填金は含まない。

【肥育豚】 飼料費などの減少により、肥育豚生産費は減少

肥育豚の全算入生産費は、3万3622円(前年比0.6%減)と前年をわずかに下回った(表2、図6)。費用合計の59.9%を占める飼料費は2万292円(同3.2%減)と前年をやや下回り、14.1%を占める労働費は4761円(同0.1%減)と前年並みとなった。

なお、肥育豚1頭当たりの販売価格は、3万8723円(同5.7%高)と前年をやや上回った。これは、COVID-19の影響により巣ごもり需要が旺盛となったことによるものとみられる。

表2 令和2年 肥育豚1頭当たりの生産費

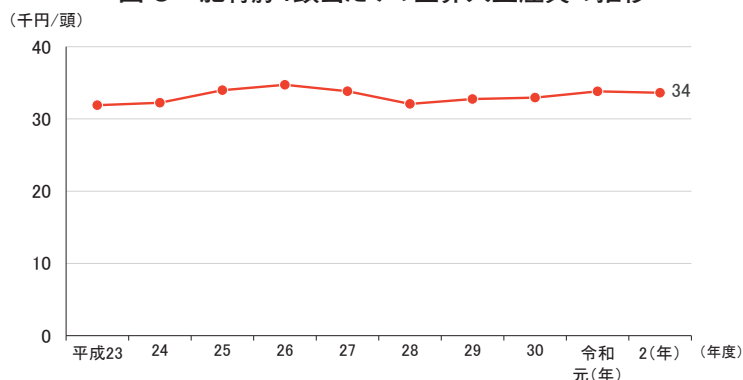
区分	単位	肥育豚		
			前年比 (増減率)	構成割合
物財費	円	29,116	▲ 0.4%	85.9%
飼料費	〃	20,292	▲ 3.2%	59.9%
労働費	〃	4,761	▲ 0.1%	14.1%
費用合計	〃	33,877	▲ 0.3%	100.0%
全算入生産費	〃	33,622	▲ 0.6%	
参考	1 経営体当たり販売頭数	頭	1,373.8	5.6%
	販売月齢	月	6.4	0.0%
	販売時生体重	kg	114.5	0.2%
	販売価格	円/頭	38,723	5.7%
	1頭当たり投下労働時間	時間	2.91	▲ 1.4%

資料：農林水産省「令和2年 肥育豚生産費」

注1：飼料費には、配合飼料価格安定制度の補填金は含まない。

注2：全算入生産費は、「資本金・地代全額算入生産費」の略称。

図6 肥育豚1頭当たりの全算入生産費の推移



資料：農林水産省「令和2年 肥育豚生産費」

注1：飼料費には、配合飼料価格安定制度の補填金は含まない。

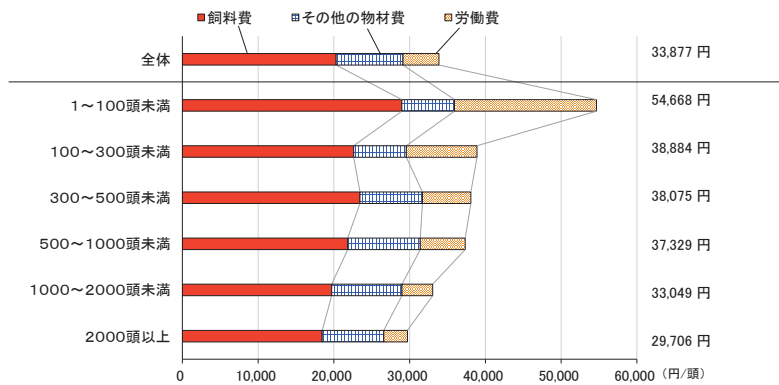
注2：全算入生産費は、「資本金・地代全額算入生産費」の略称。

注3：調査期間は、平成23～30年度は4月～翌3月、令和元年以降は1～12月。

飼養規模ごとの費用合計を見ると、規模が大きい経営ほど費用合計が低くなっている(図7)。費用合計が最も高いのは「1～100頭未満」の5万4668円、最も低いのは「2000

頭以上」の2万9706円で、その差は2万4962円となった。なお、「1～100頭未満」は、ほかの区分に比べ、飼料費および労働費が特に高くなっている。

図7 令和2年 飼養規模ごとの肥育豚1頭当たりの費用合計



資料：農林水産省「令和2年 肥育豚生産費」

注1：飼養頭数規模は、肥育豚の飼養頭数である。

注2：飼料費には、配合飼料価格安定制度の補填金は含まない。

(畜産振興部 前田 絵梨)

【牛乳生産費】令和2年の牛乳生産費、前年度比4.0%増

全国の搾乳牛1頭当たりの全算入生産費は、82万8207円(前年比4.0%増)とやや増加した(農林水産省「令和2年牛乳生産費」、表3、図8)。地域別に見ると、北海道は、77万9887円(同3.9%増)とやや増加し、都府県も、88万8759円(同4.1%増)とやや増加した。費用合計は、物財費と労働費に大別され、令和2年でのそれぞれの割合は、82.5%と17.5%となった。さらに、物財費

のうち、特に大きな割合を占める飼料費は全国、北海道および都府県いずれにおいても前年を上回った。

1頭当たりの労働時間は、全国平均では96.88時間(同2.7%減)と、統計開始以降初めて100時間を下回った前年から引き続き短縮されており、北海道では85.19時間(同1.4%減)で、都府県においても111.55時間(同3.7%減)となった。

表3 令和2年 牛乳生産費(搾乳牛1頭当たり)

区分	単位	全国			北海道			都府県			
			前年比 (増減率)	構成割合		前年比 (増減率)	構成割合		前年比 (増減率)	構成割合	
物財費	円	782,582	2.2%	82.5%	737,287	1.2%	82.9%	839,343	3.4%	82.1%	
うち 飼料費	〃	422,646	2.7%	54.0%	367,148	2.6%	49.8%	492,190	2.9%	58.6%	
うち 流通飼料費	〃	344,888	3.2%	(81.6%)	263,516	3.1%	(71.8%)	446,858	3.5%	(90.8%)	
牧草・放牧・採草費	〃	77,758	0.5%	(18.4%)	103,632	1.2%	(28.2%)	45,332	▲2.3%	(9.2%)	
乳牛償却費	〃	174,711	1.9%	22.3%	192,750	▲0.5%	26.1%	152,105	5.7%	18.1%	
労働費	〃	165,952	▲1.1%	17.5%	152,557	0.5%	17.1%	182,739	▲2.6%	17.9%	
費用合計	〃	948,534	1.6%	100.0%	889,844	1.1%	100.0%	1,022,082	2.2%	100.0%	
全算入生産費	〃	828,207	4.0%		779,887	3.9%		888,759	4.1%		
参考	1頭当たり3.5%換算乳量	kg	9,811	1.5%		9,925	1.3%		9,668	1.6%	
	1頭当たり労働時間	時間	96.88	▲2.7%		85.19	▲1.4%		111.55	▲3.7%	
	1経営体当たり搾乳牛飼養頭数	頭	61.2	4.3%		82.7	0.4%		46.2	6.7%	

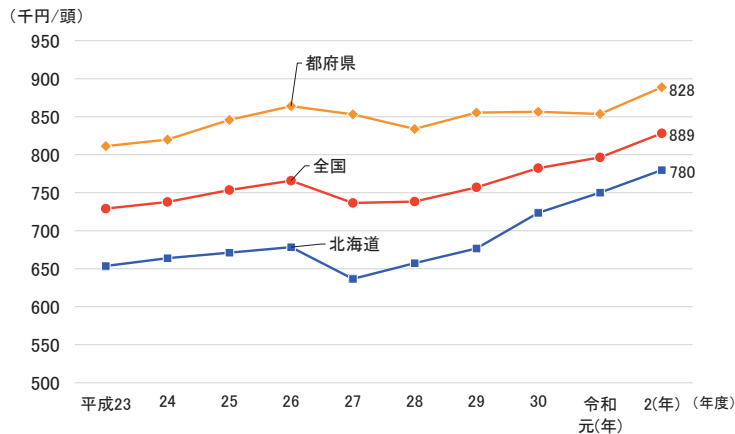
資料：農林水産省「令和2年 牛乳生産費」

注1：飼料費には、配合飼料価格安定制度の補填金は含まない。また、構成割合の()内は、飼料費に占める割合。

注2：飼料費および乳牛償却費の構成割合については、物財費に対する割合を示している。

注3：全算入生産費は、「資本利子・地代全額算入生産費」の略称。

図8 搾乳牛1頭当たり全算入生産費の推移



資料：農林水産省「畜産物生産費」(平成23年度～令和元年)、「令和2年 牛乳生産費」(令和2年)

注1：調査期間について、平成23～30年度は4月～翌3月、令和元年以降は1～12月。

注2：飼料費には、配合飼料価格安定制度の補填金は含まない。

注3：全算入生産費は、「資本利子・地代全額算入生産費」の略称。

(酪農乳業部 小木曾 貴季)

鶏卵

令和3年12月の鶏卵卸売価格、全日210円で推移

令和3年12月の鶏卵卸売価格(東京、M玉基準値)は、1キログラム当たり210円(前

年同月比32円高)と前年同月を上回った(図)。鶏卵卸売価格の動向を見ると、3年は、

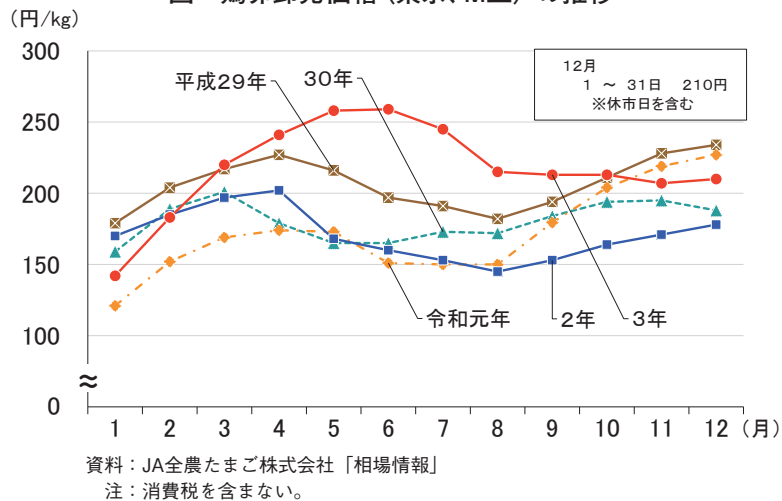
昨冬の高病原性鳥インフルエンザの発生により採卵鶏の殺処分羽数が多かったことなどから、3月以降、10カ月連続で前年同月を上回って推移している。鶏卵価格は、例年、夏場に底を迎え、最需要期の冬場に向けて上昇する傾向があるが、3年は例年とは異なる動向となっている。年内最高値となることの多い12月だが、3年12月の同価格は、全日同210円で推移し、前月から同3円上昇した

ものの、最高値とはならなかった。

供給面は、11月以降、高病原性鳥インフルエンザの発生が複数県で確認されているものの、全般的には産卵に適した時期であり、卵重が増加するなど生産は順調とみられる。

需要面は、COVID-19の拡大が懸念される中、外食需要の回復は不透明であるものの、おでんや恵方巻などの季節需要の高まりが期待される。

図 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



令和4年度の補填基準価格および安定基準価格が決定

農林水産省は令和3年12月24日、「令和4年度鶏卵生産者経営安定対策事業」のうち、「鶏卵価格差補填事業」に係る補填基準価格

および「成鶏更新・空舎延長事業」の発動基準となる安定基準価格を決定した。補填基準価格は鶏卵1キログラム当たり181円、安定基準価格は同159円と、前年度と同水準となった（表）。

表 鶏卵の補填基準価格および安定基準価格

(単位：円/kg)

	令和3年度	4年度
補填基準価格	181	181
安定基準価格	159	159

資料：農林水産省

(畜産振興部 前田 絵梨)